

令和元年度 竹田教育事務所

エリア別特別支援教育コーディネーター研修会

演習

通常の学級における
個別の指導計画
作成・活用について

期日：令和元年7月1日（月）

本日の演習の流れ

1. 「個別の指導計画」作成、活用について説明

2. グループ演習・協議（作成グループ、活用グループ）

作成グループ	活用グループ
①演習（30分） 自校（園）の幼児児童生徒の実態のわかる資料を用いて、「個別の指導計画」を作成。	①演習（30分） 持参した作成済の「個別の指導計画」の写しを用いて、加筆、修正。
②協議（20分） 作成した「個別の指導計画」について協議。（幼児児童生徒の実態の実態を踏まえ検討） ※2名程度	②（20分） 加筆、修正した「個別の指導計画」について協議。（幼児児童生徒の現在の様子と支援方法の評価を踏まえ検討）
③発表（10分）	③発表（10分）

個別の指導計画に関して改善すべき点



先生方の困りは……。



- 作成後のPDCAサイクルがうまく機能していない。
- 質の向上が必要である。
- 担当教師の経験値や力量に差がある。それを解消するための交流の場の設定が必要である。
- 実態に応じた目標や指導内容の設定に課題が見られる。
- 教職員の研修が必要だと感じる。(教育課程との関連、作成方法、評価、引き継ぎ)
- 年度を跨いで確実に引き継ぎを行う必要がある。
- 障がい特性にあった具体的な指導計画と改善に向けた指導・支援に生かすための目標に沿った評価が必要である。
- 通常学級における特別な支援が必要な子どもの作成をすること。
- 実態把握、計画立案活用に向けた研修が必要である。
- 合理的配慮なのか個別の指導・支援なのか区別が難しいため、どこに何を記載すればいいのかが整理する必要がある。
- 通常学級の先生方が、どんな児童生徒につくればよいか迷っている。
- 通常学級に在籍する特別な支援が必要な児童生徒の作成率を上げる必要がある。
- 情緒面に課題がある場合の指導計画が曖昧。

子どもに合った個別の指導計画作成・活用

引き継ぎや組織的な対応に向けた校内体制の整備

通常学級で教育的支援を必要とする児童生徒

平成24年12月 文部科学省公表

知的発達に遅れはないが、学習面または、
行動面で著しい困難を示す児童生徒

6.5% (推定値)

学習面の
著しい困難
4.5%

生活面の
著しい困難
3.6%

学習面・行動面ともに著しい困難 1.6%
※ いずれも推定値

小学校 7.7%

第1学年	9.8%
第2学年	8.2%
第3学年	7.5%
第4学年	7.8%
第5学年	6.7%
第6学年	6.3%

中学校 4.0%

第1学年	4.8%
第2学年	4.1%
第3学年	3.2%

個別支援の構築

主な発達障がい

自閉症スペクトラム障がい

ADHD

LD

- ・対人関係、社会性の障がい
- ・特定の事物へのこだわり
- ・興味、関心の偏り
- ・コミュニケーションの困難さ
- ・言語発達の遅れ
(アスペルガー症候群は遅れはない)等

- ・不注意
- ・衝動性
- ・多動性

- ・「読む」「書く」「計算する」など特定の分野の極端な落ち込み

本人の努力だけで改善が
図れるものではない

診断名だけで判断せず、
個人の様子や状態を
把握する

個別支援の構築

- ・「困り」は、本人なりに抑制しているが、長い時間の持続は難しい場合がある
※本人の努力では解決しがたい
- ・落ち着きのなさが学習のつまずきに。また、学習のつまずきが落ち着きのなさにも
- ・「幼い頃からの失敗経験・満たされない承認欲求」
「他者と自分を比べ、あせりや怒りが増す」
ことから
『著しい学習意欲、学力の低下』
『やる気がなく投げやりな態度』
『自分の世界に引きこもる』など

「対処療法的指導」を繰り返すよりも
「**原因療法的支援**」が有効

学習上・生活上の困りの例

- ・漢字を正しく書けない、読めない
- ・文章をスムーズに読むことが苦手

形態認知、記憶想起、語彙能力、協調運動、処理速度・・・などの問題

- ・話を最後まで聞くことが苦手

音韻認知、意味理解等の問題
「不注意」「多動」「衝動」

- ・忘れ物やなくし物が多い
- ・課題や作業などの順序だてて行うことが苦手

選択性、持続性、転導性、方向性の問題など
「不注意の問題」

- ・じっとしていることが苦手
- ・おしゃべりが多い

移動性、非移動性「多動」の問題

- ・相手の話をさえぎって話しはじめる
- ・他人の邪魔や妨害と思われる行為が多い

過覚醒、行動抑制の問題など
「衝動性」の問題

- ・授業の途中から落ち着かなくなる
- ・他人の感情や事の重大さに鈍感
- ・わがままで自分勝手

情報処理の問題
社会的認知の問題
感覚知覚の問題

あくまで、上記のようなことが原因として考えられるという一例

指導・支援方法の構築（行動分析の視点から）

次の事例に対して、どのような指導・支援方法が考えられますか？

先行刺激・先行条件

- ・授業が15分程度経過する。



行動

- ・椅子にじっと座っていない。
- ・周りの友達に話しかける。



後続刺激・結果

- ・教師が注意しても、長続きしない。
- ・厳しく注意すると、キれる。



考えられる指導・支援

指導・支援方法の構築（行動分析の視点から）

次の事例に対して、どのような指導・支援方法が考えられますか？

先行刺激・先行条件

- ・授業が15分程度経過する。



行動

- ・椅子にじっと座っていない。
- ・周りの友達に話しかける。



後続刺激・結果

- ・教師が注意しても、長続きしない。
- ・厳しく注意すると、キれる。



【 考えられる原因（幼児児童生徒の困り） 例 】

- ①ADHD傾向であるためじっとしていることが苦手（5身体の動き（1）姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること）
- ②学習内容がわからず、学習への意欲や関心が低い（2心理的な安定（3）障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること）
- ③注意機能の特性により、注目すべき箇所がわからない。何をすればよいかわからない。（4環境の把握（2）感覚や認知の特性については理解と対応に関すること）



【 考えられる指導・支援 例 】

指導・支援方法の構築（行動分析の視点から）

【 考えられる原因（幼児児童生徒の困り） 例 】

- ①ADHD傾向であるためじっとしていることが苦手（5身体の動き （1）姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること）



※参考 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編 P84

【 考えられる指導・支援 例 】

①ADHDのある幼児児童生徒の場合、身体を常に動かしている傾向があり、自分でも気付かない間に座位や立位が大きく崩れ、活動を継続できなくなってしまうことがある。

このような幼児児童生徒に対しては、身体を動かすことに関する指導だけでなく、**姿勢を整えやすいような机やいすを使用することや、姿勢保持のチェックポイントを自分で確認できるような指導**を行うことが有効な場合がある。

そこで、姿勢を保持することが困難なADHDのある幼児児童生徒に対しては、この項目に加え、例えば、「**2心理的な安定**」や「**4環境の把握**」等の区分に示されている項目の中から必要な項目を選定し、それらを相互に関連付けて具体的な指導内容を設定することが大切である。

指導・支援方法の構築（行動分析の視点から）

【 考えられる原因（幼児児童生徒の困り） 例 】

- ②学習内容がわからず、学習への意欲や関心が低い(2心理的な安定 (3)障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること)



※参考 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編 P64

【 考えられる指導・支援 例 】

②LDのある児童生徒の場合、数字の概念や規則性の理解や、計算することに時間がかかったり、文章題の理解や推論することが難しかったりすることで、自分の思う結果が得られず、学習への意欲や関心が低いことがある。そこで、自己の特性に応じた方法で学習に取り組むためには、**周囲の励ましや期待、賞賛**を受けながら、何が必要かを理解し、**できる、できたという成功体験**を積み重ねていくことが大切である。

指導・支援方法の構築（行動分析の視点から）

【 考えられる原因（幼児児童生徒の困り） 例 】

- ③注意機能の特性により、注目すべき箇所がわからない。何をすればよいかわからない。
（4環境の把握 （2）感覚や認知の特性については理解と対応に関すること）

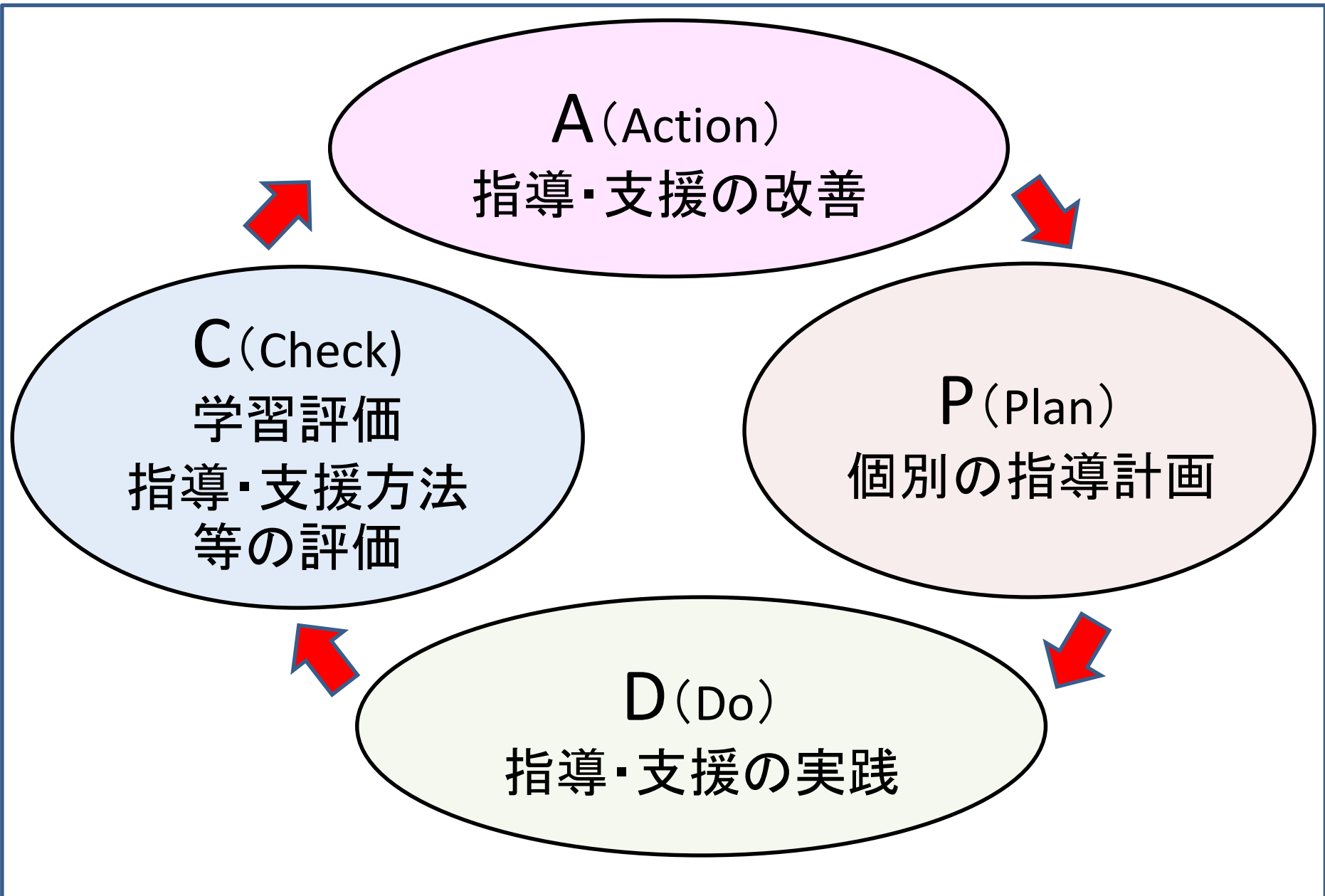


※参考 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編 P75

【 考えられる指導・支援 例 】

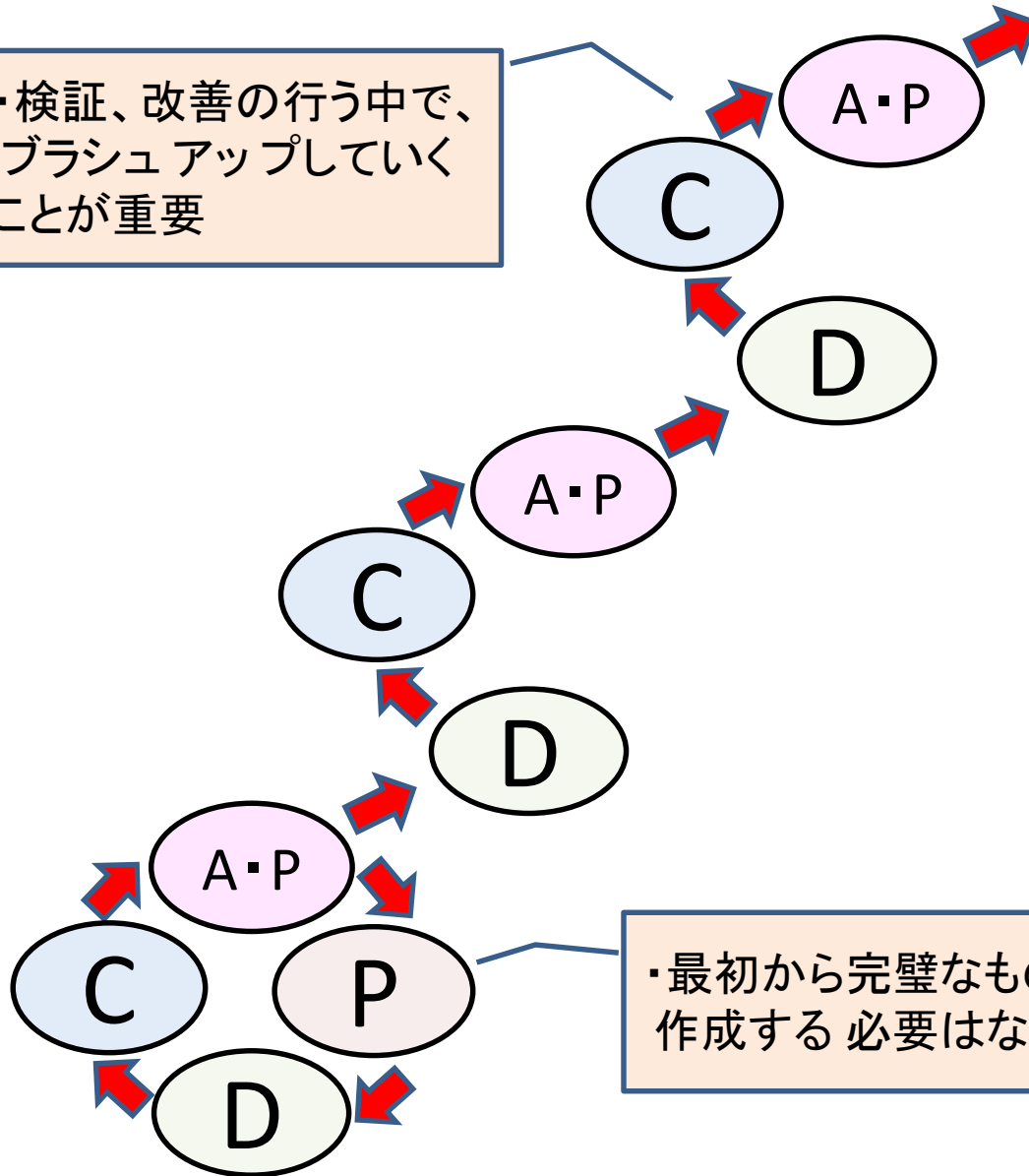
- ③ADHDのある幼児児童生徒の場合、注意機能の特性により、注目すべき箇所がわからない、注意持続時間が短い、注目する対象が変動しやすいなどから、学習等に支障をきたすことがある。そこで、**注目すべき箇所を色分けしたり、手で触れるなど他の感覚も使ったりすることで注目しやすくしながら、注意を持続させることができることを実感し、自分に合った注意集中の方法を積極的に使用できるようにすることが大切である。**

PDCAサイクル(イメージ1)



PDCAサイクル(イメージ2)

・検証、改善の行う中で、
ブラッシュアップしていく
ことが重要



・最初から完璧なもの
を作成する必要はない

PDCAサイクルによるスパイラルアップ(イメージ)

↑ 個別の指導計画

高校

↑ 個別の指導計画

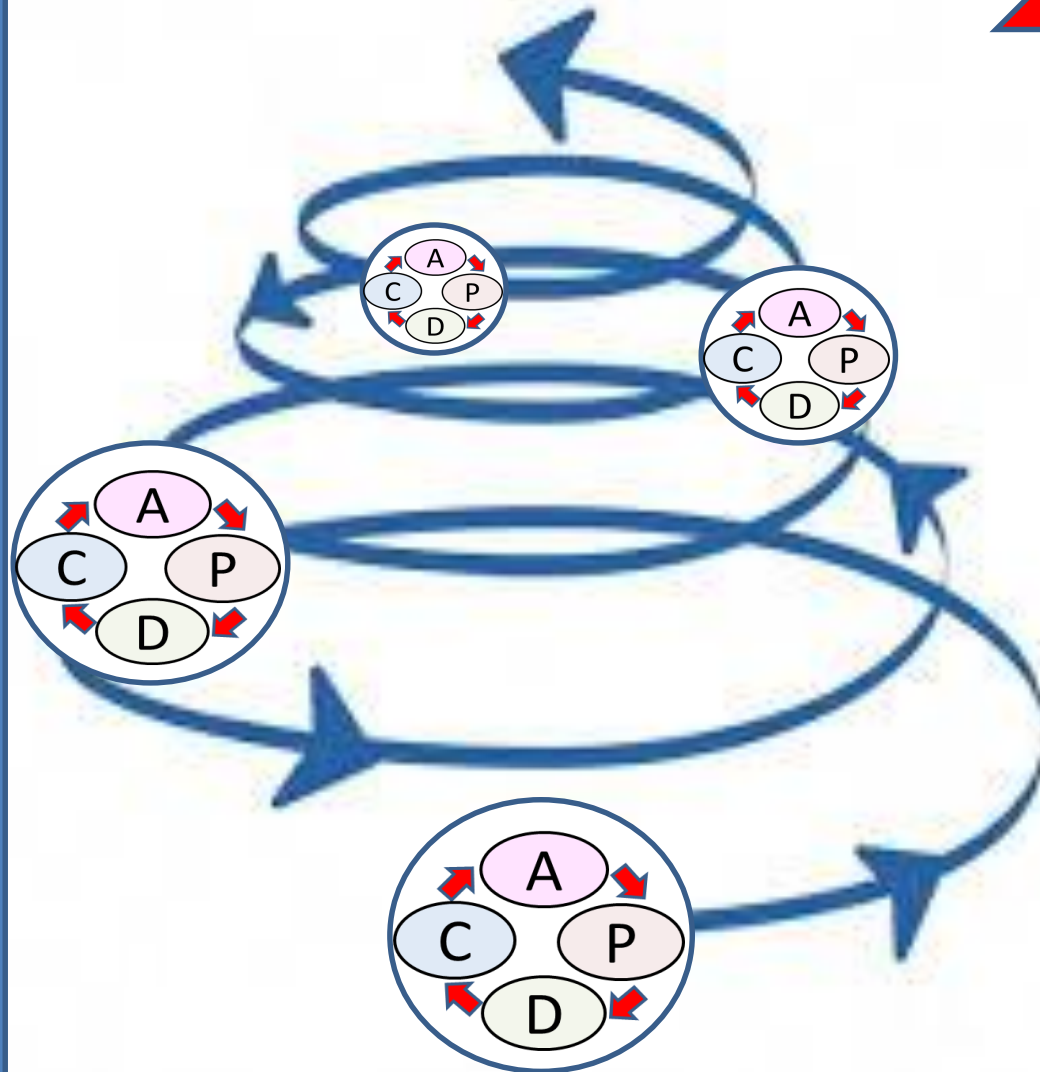
中学校

↑ 個別の指導計画

小学校

↑ 個別の指導計画

幼稚園



指導・支援の質の向上

PDCAサイクルを回すには

- ・PDCAサイクルの目的は、「継続的に改善を図る」こと。（最初のPを素晴らしいものにしようと時間と労力をかけ続けるのは……）
- ・D（実践）を分析し評価することで、PDCAサイクルによるスパイラルアップにつながる。
- ・経験と知識に裏打ちされた、指導・支援へと質を向上させる。

成果の出ない指導・支援の方法を継続するのではなく、成果が出なければ次の手を打つ。

評価の記録には

- ☛ うまくいった指導や支援の方法
 - ☛ うまくいかなかった指導や支援の方法
- 両方を残しておくとよい

こうした個別の教育支援計画と個別の指導計画の作成・活用システムを校内で構築していくためには、障害のある児童などを担任する教師や特別支援教育コーディネーターだけに任せるのではなく、全ての教師の理解と協力が必要である。学校運営上の特別支援教育の位置付けを明確にし、学校組織の中で担任する教師が孤立することのないよう留意する必要がある。このためには、校長のリーダーシップのもと、学校全体の協力体制づくりを進めたり、全ての教師が二つの計画についての正しい理解と認識を深めたりして、教師間の連携に努めていく必要がある。

基盤となる校内体制について

- 校内委員会の設置と開催の予定が立てられていますか。
- 特別支援学級の指導や支援は、特別支援学級担任や特別支援教育コーディネーターなど一部の教職員に限られていませんか。
- 保護者との協力関係ができていますか。
- 特別支援教育に関する研修の機会を設けていますか。
- 指導や支援に関して必要に応じて関係機関等を利用できていますか。

自校の取組はどうでしょうか？

